

A. 聖書解釈と政治思想

オリエンテーション

導入：脳神経科学とキリスト教

1. 聖書の政治思想とキリスト教社会主義

2. 現代政治思想とキリスト教

2-1：民主主義とキリスト教

2-2：政治的なもの——アーレント、ムフ

2-3：シュミットからアガンベンへ

7/8

2-4：ジジエクとパウロ

7/15

Exkurs

現代キリスト教思想とユダヤ的なもの

キリスト教と科学技術

7/22

<前回>現代キリスト教思想とユダヤ的なもの

1. アウシュヴィッツの衝撃

「神学界でアウシュヴィッツ以後の神学が検討され始めるのは、概括的に言えば、ドイツでは、哲学者アドルノの「アウシュヴィッツの後で詩を書くことは野蛮である」（『ミニア・モラリア』）との指摘から一〇年、一九六〇年代からで、H・ゴルヴィッツァーと共に、E・ベートゲやF・W・マルクヴァルト、B・クラッパートらが参加した。このグループの場合は、主に「罪責告白」の視点からの接近と言える。他方、一九六〇年代後半以降、「神」概念の検討をも含む、この神学の取り組みが積極的に試みされてきたのは、ユダヤ人の多く居住するアメリカにおいてであった」、「ヴィーゼルの小説『夜』」、「これらの神学者の応答は、「神はどこにいたか」（神義論的問い）と「人間はどこにいたか」（罪責問題的問い）という二つの問いに分化されると言える。」（金子啓一「第三章 神と現代人（2）——アウシュヴィッツ・ヒロシマと現代神学」、野呂芳男・熊澤義宣編『総説現代神学』日本基督教団出版局、1995年、332頁）

2. 二つの問い

- ・ユダヤ教との歴史的関係の再考、反ユダヤ主義に対するキリスト教の責任。
- ・現代におけるキリスト教とユダヤ教の問いの共有（神義論あるいは宇宙論）

(1) 新約聖書学—イエス、パウロ、その後—

<争点>マタイによる福音書 27章、あるいはローマの信徒への手紙 11章

3. ジョン・ドミニク・クロッサン『イエスとは誰か——史的イエスに関する疑問に答える』新教出版社、2013年。(John Dominic Crossan & Richard G. Watts, Who Is Jesus? Answering your Questions about the Historical Jesus, Westminster John Knox Press, 1996.)

「この段階では反ユダヤ主義ともユダヤ人差別とも言えません、「そのヨハネにしてもユダヤ人と非ユダヤ人を区別していたとは思えません」、「ところが四世紀にローマ帝国がキリスト教を国教にしたとき、まさにあの磔刑物語がキリスト教徒にユダヤ人を責め立てる口実を与えてしまい、ヨーロッパの命取りになる恐ろしいホロコースト時代を準備する長い歴史が始まります。」(141)

(ジョン・ドミニク・クロッサン『誰がイエスを殺したのか——反ユダヤ主義の起源とイエスの死』青土社、2001年。)

4. Rosemary Radford Ruether, *To Change the World. Christology and Cultural Criticism*, SCM Press, 1981.

This negative projection of Christian self-criticism on to Judaism can not be corrected without a

positive appreciation of Judaism, of the rabbinic tradition and Jesus' place in the Judaism of his time.

5. モルトマン『わが足を広きところに』（新教出版社）、「第五章 キリスト教とユダヤ教の対話」、「ユダヤ人とキリスト者は、それぞれの仕方、主の証人である。」（369頁）

6. 新しいパウロ解釈：1980年代以降

体制派パウロから戦うパウロへ。政治哲学におけるパウロへの注目。

アメリカの聖書学会（SBL）の「聖書と帝国」分科会（*The Bible and Empire Unit*）

パウロ・ルネサンス、イエスからパウロへ。

「パウロの神学の社会革命をひき起こす潜在力を秘めていた」「ユダヤ人と異邦人の一体化」（サンダース、24）

「レーニン主義者パウロ」「アウトカーストの共同体」「無制約的な普遍主義への関係にもとづいて形成された戦う共同体」（ジジエク『操り人形と小人』青土社、195）

7. Richard A. Horsley (ed.), *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.

8. cf. ユダヤ思想からのパウロ論：

Jacob Taubes, *Die politische Theologie des Paulus*, Wilhelm Fink Verlag, 1993. (ヤーコブ・タウベス『パウロの政治神学』高橋哲哉・清水一浩訳、岩波書店、2010年。)

(2) キリスト教史における反ユダヤ主義

9. 反ユダヤ主義の源泉・前提

古代キリスト教：キリスト教の国教化と反ユダヤ主義

エウセビオスは、その『教会史 1、2、3』（秦剛平訳、山本書店）において——コンスタンティヌス大帝をキリスト教の側から正当化する歴史叙述——、「彼らユダヤ民族全体に「主を殺した者たち」（キュリオクトノイ）、「キリスト殺し」（クリストフォノイ）という人類史上前代未聞の、悪質無類のレッテルを無神経にもはりつけた最初の教会人だった」（1、287頁）。

10. 近代世界（イタリア・ルネッサンスと宗教改革以降）

ゲッターのユダヤ人

11. 啓蒙主義以降、国民国家の成立とユダヤ人

12. 政教分離システム化での新しいユダヤ人への差別＝反ユダヤ主義

シオニズムとナチズム

13. 反ユダヤ主義の深層・真相

反ユダヤ主義はキリスト教自身の歪曲を伴った。ナチズムはドイツ的キリスト教というキリスト教の変質形態を発生させた。

・塩川伸明『民族とネイション ナショナリズムという難問』岩波新書。

・小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会。

(3) 問いの共有：宇宙論と神、創発主義

14. 神義論：神は実はできたはずなのにしなかった（全能性を保持しつつ正義性を問う）。

↓

弱き神と人間の責任（正義性・善性を保持しつつ全能性を問う）

ヨーナス、モルトマン、ホワイトヘッド、ヴェイユ

前提としてのユダヤ神秘主義あるいは現代科学？

15. 宇宙論あるいは創造論と神

16. テイリッヒ cf. ヨーナス

次元論：システムは、先行するシステムの創発的な秩序として生成する（創発性）

人間存在（生）において、こうして生成した諸次元が統合されている

生命システム → 心的システム → 社会システム

物質・無機的 有機体・生命 心 精神 歴史

物質／生命／心／精神（社会・文化）

道徳・宗教

17. 科学から神へ：デイヴィス

- ・全体論＋進化論
- ・神とは何か？

18. 関連文献

- ・ 芦名定道「脳科学は宗教哲学に何をもたらしたか」（芦名定道・星川啓慈編『脳科学は宗教を解明できるか？』春秋社、2012年。）、「ティリッヒ——生の次元論と科学の問題」（現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』創刊号、2000年、1-16頁）。
- ・ Paul Davies, *God and the New Physics*, J.M.Dent & Sons, 1983.（P.C.W.デイヴィス『宇宙はなぜあるのか——新しい物理学と神』岩波書店。）
- ・ 清水博『生命を捉え直す 生きている状態とは何か』（増補版）中公新書、1990年。
「生命科学と宗教」（『宗教とは』（岩波講座転換期における人間9）岩波書店、1990年）。

2. 現代政治思想とキリスト教

2-2：政治的なもの——アーレント、ムフ

(1) 西欧的近代における政治と宗教

1517年（10月31日）：ルターの95カ条の提題、宗教改革の発端。

1518年：スイスでツヴィングリの宗教改革

1519年：ルターとエックの論争

1521年：ヴォルムス勅令（カール五世、ルターを帝国追放）

1524-25年：農民戦争

宗教戦争：1529年・第一次カッペル戦争（スイス）、1531年・第二次カッペル戦争

1546-47年・シュマルカルデン戦争（ドイツ）、

1562-98年・ユグノー戦争（フランス）、1618-48年・30年戦争

1534年：イエズス会創設、ヘンリー8世による国王至上法（首長令）

1545-63年：トリエント公会議（教皇至上権、カトリック教義の確認）

1555年：アウクスブルク宗教和議

（諸侯と諸都市にプロテスタント・カトリックの選択の自由を承認）

1608年：プロテスタント諸教派「同盟」結成

1609年：カトリック諸教派「連盟」結成

1618年：プラハでプロテスタント蜂起→30年戦争へ

1618-1643年：30年戦争（ボヘミア・プファルツ戦争）

1618年、プロテスタントとカトリック、北ドイツで衝突

1624年、対ハプスブルク同盟、イングランド、オランダ、フランス、スウェーデン、デンマーク、反ハプスブルクで結束

1625-29年、デンマーク・ニーダーザクセン戦争

1630-35年：スウェーデン戦争（グスタフ・アドルフ）

1635-1648年：フランス・スウェーデン戦争（リシュリュー介入）

1640年、皇帝フェルディナント3世、和平交渉を開始

1648年、ツスマルシャウゼンの戦い、フランス・スウェーデン連合軍、皇

帝・バイエルン連合軍に勝利。ランスの戦い（フランス語版）、フランス軍、スペイン軍を撃破。スウェーデン軍、プラハを包囲

1642年：ピューリタン革命（1649年からイギリス、共和制）

1648年：ウェストファリア条約（ヴェストファーレン条約）締結

1648年：オスマン軍ウィーン包囲

1652/65/72：英蘭戦争

1660年：イギリス、王政復古

1. 中世的な封建的そして広域的秩序の終焉

宗教改革・宗教戦争の帰結

ウェストファーレン体制（主権国家としての国民国家）から啓蒙主義へ

神聖ローマ帝国、ハプスブルグ家

絶対王政・市民革命

カトリック教会

2. 国民国家の枠内での政治と宗教

信教の自由（宗教的寛容）、政教分離・公と私分離

正 善

政治 宗教・民族

国民国家：対立の原因を私的領域に押し込んで、公的領域の同一性を確保する。

啓蒙主義：公的領域の合理化にとって普遍性をめざす。

↓

3. 自由民主主義（19世紀の半ば）

↓

4. 矛盾：

・国民国家の同一性は近代以前の（非合理的な）諸要素を象徴的な核として構成されており、その特殊性を完全に脱却することは不可能である。合理性を抑圧する傾向を持つ。

・啓蒙的普遍主義（国際主義）は国民国家の特殊性を乗り越えて進もうとする。非合理的伝統を解体する傾向を持つ。

この矛盾の一つの現れが、政治と経済の対立である。

理論のレベルにおいては、政治は道徳に解消される。

↓

5. 問題：

・国民国家の同質性は内と外の対立、そして内部の多元性を克服できるか。多元性をいわずに創造的に作用するものとして生かす統一性は可能か。

・啓蒙的普遍主義（抽象的）は独力で自らを支えうるか。抽象性の上に共同性を構築できるか。

批判原理と形成原理との統合を実現するという課題（ティリッヒ）。

（2）政治哲学の復権と政治的なもの

6. アーレント：遺稿集『政治の約束』

古代ギリシャのポリス→政治的なもの

公共性、言語・自由、政治

複数性・多元性、闘争・討議

What distinguishes the communal life of people in the polis from all their forms of human communal life --- with which the Greeks were most certainly familiar --- is freedom. ... Being free and living in the polis were, in a certain sense, one and the same.

Here the meaning of politics, in distinction to its end, is that men in their freedom can interact with one another without compulsion, force, and rule over one another, as equals among equals, commanding and obeying one another only in emergencies --- that is, in times of war --- but otherwise managing all their affairs by speaking with and persuading one another. (116-117)

「ポリスにおける人々の共同生活をその他のあらゆる形態の人間の共同生活——それらについてギリシャ人たちは、間違いなく、よく知っていたはずだ——から区別するのは、自由である。……自由であることとポリスに住むことは、ある意味では、同一のことだった」

(アーレント、2008、148)、「政治の意味とは、以下の通りとなる。すなわち、自由な人間たちが、強制も暴力(force)も互いの支配もなく、平等者中の平等者として、相互に交流することができる。また、互いに命令と服従を行うのは例えば戦時のような緊急事態が発生した場合のみであり、そうでない限りは、互いに語り合い説得し合って自分たちのすべての問題を処理することができるということである。」(同、149)

政治：自由な共同性において、相互の説得のための言論を用いた合意形成の営み

7. アーレント：人間存在の複数性の上に政治思想を構想。

政治的なもの人間学的条件である「行為」(action) → その脆さへの議論。

cf. ホブズにおける弁証法：闘争・脆さ → 契約・政治・公共性

8. 「行為 action とは、物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行なわれる唯一の活動力であり、複数性という人間の条件、すなわち地球上に生き世界に住むのが一人の人間 man ではなく、複数人間 men であるという事実に対応している」(アーレント、1958、20)、「多種多様な人びとがいるという人間の複数性は、行為と言論がともに成り立つ基本的条件であるが、平等と差異という二重の性格をもっている。」(同、286)、「人びとは行為と言論において、自分がだれであるかを示し、そのユニークな人格的アイデンティティを積極的に明らかにし、こうして人間世界にその姿を現わす。」(291)

9. 言論における合意が限界。言論・行為の脆さの議論——不可逆性(irreversibility)と予言不可能性(unpredictability)。

「行為と言論は、行為の網の目と他者の言葉に取り囲まれ、そのような行為の網の目や他人の言葉と絶えず接触している」(同、304-305)、「この環境の中では、一つ一つの反動が一連の反動となり、一つ一つの過程が新しい過程の原因となる。このために、行為の結果には限界がないのである」(同、307)、「行為というのは、……一切の境界線を突破するという固有の傾向をもっている」(同、308)、「制限や境界線は、人間事象の安定にとって極めて重大である」、「行為には、この無制限性という第一の特徴に加えて、行為の結果を予知できない予言不可能性という第二の顕著な性格があり、政治体の制限や境界線は、この予言不可能性を相殺するにはまったく無力である。」(同、309)

10. 脆さにもかかわらず、政治的なものが存続可能になるためには、赦しと約束が必要。

「行為が始める過程の不可逆性と予言不可能性にたいする救済は……行為そのものの潜在能力の一つが救済に当たるのである。不可逆性というのは、人間が自分の行なっていることを知らず、知ることでもできなかったにもかかわらず、自分が行なってしまったことを元に戻すことができないということである。この不可逆性の苦境から脱けだす可能な救済は、赦しの能力である。これにたいし、未来の混沌とした不確かさ、つまり、不可予言性にたいする救済策は、約束し、約束を守る能力に含まれている」(同、371)、「約束の実行に拘束されることがなければ、私たちは、自分のアイデンティティを維持することができない。……この暗闇を追い散らすことができるのは、他人の存在によって公的領域を照らす光だけである。なぜなら、この他人は、約束する人とそれを実行する人とが同一人物であることを確証するからである。したがって、赦しと約束というこの二つの能力は、共に複

数性に依存し、他人の存在と行為に依存している。」(同、372)

11. ムフ

自由主義的な政治思想（ハーバーマス、ロールズ）への批判

政治（欲望・権力）と道徳（合理性）

「討議民主主義には多くの異なるヴァージョンが存在するが、大きくわけて二つの学派に分類することができる。第一のものはジョン・ロールズに、第二のものはユルゲン・ハーバーマスの大きな影響を受けている。それで私は、彼ら二人を、それぞれの後継者であるジョシュア・コーエン（ロールズ側）とセイラ・ベンハビブ（ハーバーマス側）とあわせて論じることにする」「民主主義的自由主義を精緻化すること」(『民主主義の逆説』以文社、130-131)、「政治の正しい領野は、不偏不党の原理に導かれた理性的人間による討論の交換を同一視される」(133)、「民主主義の手続きは、利害を精算し、手続きを確立する妥協に到達するだけでは十分ではない。目的は「コミュニケーション的権力」を生み出すことであり、そのためには、関心ある者すべての自由にもとづく同意のための条件を確立することが必要である」(135)、「彼らが宣言するほど、私的なものと公的なものを、手続き的なものと実質的なものを分離することができないということ」(141)、「価値の多元主義の含意を回避する似たような試み」「異議申し立ての可能性があらかじめ排除するような功利的合意のうちに、自由民主主義の支持を基礎づけようとしている」(142)。

↓

12. シャンタル・ムフの「ラディカルで多元的な民主主義」(radical and plural democracy)

ロールズの正義論・政治思想を論評

「ロールズは、初めに彼の正義論を道徳哲学への寄与として提示した後に、それは政治哲学の一部として見なされるべきであると宣言したのである。ここでの問題は、最初からロールズが、道徳的言説に固有の推論様式を使用していたという事実である。この推論様式を政治の領域に適用すれば、その帰結は、道徳の諸制約のもとで種々の私的利益を調停する一種の合理的プロセスへと政治を還元してしまうことである。」(ムフ、1993、98)

13. 道徳と政治との基本的な相違、政治の固有性は合理的な調停プロセスの内に存しない。

ムフ→カール・シュミット

Chantal Mouffe, *The Return of the Political*, Verso, 1993.

7. On the Articulation between Liberalism and Democracy

The idea of a perfect consensus, a harmonious collective will, must therefore be abandoned, and the permanence of conflicts and antagonisms accepted. Once the very possibility of achieving homogeneity is discarded, the necessity of liberal institutions becomes evident. ... In a modern democracy there no longer exists a substantive idea of the good life on which all rational persons could agree, the pluralism that the fundamental liberal institutions help to secure. ... Bobbio is indeed right to assert that modern democracy must be a pluralistic democracy, and to urge us to acknowledge that socialist goals can only be achieved acceptably within the liberal democratic framework.

I believe that democracy must come to terms with pluralism because under modern conditions, where one can no longer speak of 'the people' as a unified and homogeneous entity with a single general will, the democratic logic of identity of government and governed cannot alone guarantee respect for the human rights. (104-105)

For Schmitt, the political is concerned with the relations of friend and enemy, it deals with the creation of a 'we' opposed to a 'them'; it is the realm of 'decision' not free discussion. Its subject matter is conflict and antagonism, and these indicate precisely the limits of rational consensus the fact that every consensus is by necessity based on acts of exclusion.(111)

The problem with Rawls is that by failing to distinguish properly between moral discourse and political discourse and by using a mode of reasoning specific to moral discourse, he is unable to recognize the nature of the political. Conflicts, antagonisms, relations of power disappear and the field of politics is reduced to a rational process of negotiation among private interests under the constraints of morality. (113)

Instead of shying away from the component of violence and hostility inherent in social relations, the task is to think how to create the conditions under which those aggressive forces can be defused and diverted and a pluralist democratic order made possible. (153)

14. シュミット

Carl Schmitt, *Der Begriff des Politischen*, 1933 (1927).

Die eigentliche politische Unterscheidung ist die Unterscheidung von Freund und Feind. (7)

Die Worte Freund und Feind sind hier in ihrem konkreten, existenziellen Sinn zu nehmen, nicht als symbolische oder allegorische Redesarten... (9)

Feind ist nicht der Konkurrent oder der Gegner im Allgemeinen. Feind ist auch nicht der Gegenspieler, der "Antagonist" im blutigen Wettkampf der "Agon." Feind ist am allerwenigsten irgendein privater Gegner, den man unter Antipathiegefühlen haßt. ... Feind ist also nur der öffentliche Feind, weil alles, was auf eine solche kämpfende und sich durchsetzende Gesamtheit von Menschen, insbesondere auf ein ganzes Volk Bezug hat, dadurch öffentlich wird. Feind ist hostis, nicht inimicus im weiteren Sinne; (10)

Die viel zitierte Stelle "Liebet eure Feinde"(Matth.5,44, Luk.6,27) heißt... vom politischen Feind ist nicht die Rede. ... Den Feind im politischen Sinne braucht man nicht privatim und persönlich zu hassen, und erst in der Sphäre des Privaten hat es einen Sinn, seinen "Feind", d.h. seinen Gegner, zu lieben. (11)

Der Krieg ist durchaus nicht Ziel und Zweck oder gar Inhalt der Politik, wohl aber ist er die reale Möglichkeit immer vorhandene Voraussetzung, die das menschliche Handeln und Denken in eigenartiger Weise bestimmt und dadurch ein spezifisch politisches Verhalten bewirkt. (17)

Denn erst im Krieg zeigt sich die äußerste Konsequenz der politischen Gruppierung nach Freund und Feind. Von dieser äußersten Möglichkeit her gewinnt das Leben der Menschen seine spezifisch politische Spannung.

Eine Welt, in der die Möglichkeit eines Krieges restlos beseitigt und verschwunden ist, ein endgültig pazifizierter Erdball, wäre eine Welt ohne die Unterscheidung von Freund und Feind und infolgedessen eine Welt ohne Politik. (18)

Souveränität

「政治的な行動や動機の基因と考えられる、特殊政治的な区別とは、友と敵という区別である」(シュミット、1970、15)、「友・敵概念は、隠喩や象徴としてではなく、具体的・存在論的な意味において解釈すべきである。すなわち、経済的・道徳的その他の諸概念を混入させて弱めてはならず、いわんや私的な個人主義的な意味で、心理的に、個人的な感情ないし性向の表現と解してはならない」(同、17)、「したがって、敵とは、競争相手とか相手一般ではない。また反感をいだき、にくんでいる私的な相手でもない。……敵には、公的な敵しかいない。なぜなら、このような人間の総体に、とくに全国民に関係するものはすべて、公的になるからである。敵とは公敵であって、ひろい意味における私仇ではない」(同、18-19)、「敵という概念には、闘争が現実的に偶発する可能性が含まれている」(同、25)、「戦争は決して、政治の目標・目的ではなく、ましてその内容ではないが、ただ戦争は、現実的可能性としてつねに存在する前提なのであって、この前提が、人間の行動・思考を独特な仕方と規定し、そのことを通じて、とくに政治的な態度を生み出すのである。」

(同、27)

15. 政治：合理的な合意形成の事柄ではなく、公的全体のレベルでの「友一敵」関係の問題であって、現実的可能性としての戦争を前提としたもの。友・敵の闘争と社会的欲望を前提として構築された公的営み。
16. 「いかなる宗教的・道徳的・経済的・人種的その他の対立も、それが實際上、人間を友・敵の両グループに分けてしまうほどに強力であるばあいには、政治的対立に転化してしまう」(同、33)。
17. 「政治的なもの」を構成する二つの契機：
合理的討論による合意形成、社会的欲望に連合した闘争
18. 「多元主義的民主主義の固有の性質は、支配と暴力の欠陥にあるのではなく、それらが制限され、かつまた争われることを可能にするための一群の諸制度の確立にある」(同、295)、「社会的諸関係に本来的に備わっている暴力と敵対性という構成要素を敬遠するのではなく、そうした攻撃的諸力を緩和し転用することのできる諸条件を、また多元主義的民主主義の秩序が可能になる諸条件」(同、310)を創出するという課題は、言論と討論によって遂行される合意形成を含まざるを得ない。
「政治的なもの」：敵対を前提とし、その破壊的帰結に至ることを回避する手段

<参考文献表>

1. シャンタル・ムフ『政治的なものの再興』千葉真他訳、日本経済評論社、1998年。
Chantal Mouffe, *The Return of the Political*, Verso, 1993.
2. ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学術文庫、1994年。
Hannah Arendt, *The Human Condition* (1958), 2nd Edition, The University of Chicago Press, 1998.
3. ハンナ・アレント『政治の約束』ジェローム・コーン編、高橋勇夫訳、筑摩書房、2008年。
Hannah Arendt, *The Promise of Politics* (Ed. by Jerome Kohn), Schocken Books, 2005.
4. C. シュミット『政治的なものの概念』田中浩・原田武雄訳、未来社、1970年。
Carl Schmitt, *Der Begriff des Politischen* (1927), Hanseatische Verlagsanstalt, 1933.
(長尾龍一編『カール・シュミット著作集I、II』慈学社、2007年)
5. Jon Simons (ed.), *From Agamben to Žižek. Contemporary Critical Theorists*, Edinburgh University Press, 2010.